



Q

娘婿が急逝しました。娘や孫たちの希望で、まだ自宅に骨壺を置いています。お墓に入れたくない気持ちもわかりますが、未練も残るので、早めに納骨するところが一番の供養ではないかと心配しています。親として、私はどのようにアドバイスすればよいのでしょうか？
(糸満市Kさん70代・女性)

A

Kさんのご質問をいただき、球陽寺のお葬式を調べたところ、当院の約2割が四十九日まで自宅にご遺骨を安置されていることがわかりました。

ご遺骨の安置には、寺院やお墓など専用の場所に安置する納骨と、自宅にご遺骨を仮安置する還骨(かんこつ)や帰骨(きこつ)がありますので、その詳細をご説明いたします。

納骨とは

納骨とは、故人様の大切なご遺骨を、寺院やお墓など、自宅以外の専用の場所に安置する供養のことをいいます。風葬などから火葬の時代へと移行変わっていった現代の沖縄では、お葬式の後の一般的な法要として定着しています。納骨の長所として、ウヤファーフジ(先祖)のご遺骨が安置されているお墓に納骨すれば、故人様が一人ぼっちにならず、

トータビ(唐旅=成仏)も寂しくない、という点があります。

一般的に、供養する場所が多いほど、故人様の人徳であるとの考え方が東アジア圏にはあり、沖縄でも、自宅のトーマーとお墓のご遺骨の2カ所に分けて敬う傾向があります。具体的には、自宅ではお葬式の後のナンカ(七日)という初七日から四十九日・周忌などを行い、お墓では旧暦3月のウシミー(清明祭)や旧暦7月7日のタナバタ(七夕)などの年中行事を行います。このとき沖縄では、故人様の供養が2カ所に分かれるという矛盾を補うため、ナンカやウスコー(ご法事)の際は、当日の朝一番か午前中にお墓で焼香を行い、故人様へ法要の趣旨を申し上げ、自宅へとウンチケー(案内)し、供養を2カ所にまとめる気遣いがあるといえます。

還骨とは

一方、還骨はご遺骨を自宅に短期間、仮安置する供養のことをいいます。一般的に、沖縄県外の法要といわれてきましたが、ここ数年は沖縄県全体でもかなり定着してきています。還骨のよいところは、故人様が住み慣れ親しんだ自宅でも、少しでもゆつくりとくつろいでいただき、心残りなくグソー極楽の成仏ができるようにとの配慮があります。

また、ナンカの四十九日とは、故人様が成仏するために必要な日数とする考え方で、家族・親族の遺族の方々が、故人様の厳粛な死を受け止めるための心の整理に必要な最低限の日数とする考え方があります。いきなり納骨ではなく、しばらく自宅に仮安置することで、寂しい気持ちや時間とともに供養していく気持ちへと切り替えていく大切な時間です。

その他にも、ご遺骨を安置する納骨方法や納骨場所、また継承者などを選択するため、その猶予期間としての目的も含まれます。

還骨の沖縄のしきたり

納骨については、沖縄でも詳しい方が多いと思いますので割愛し、還骨の沖縄のしきたりについてご説明いたします。

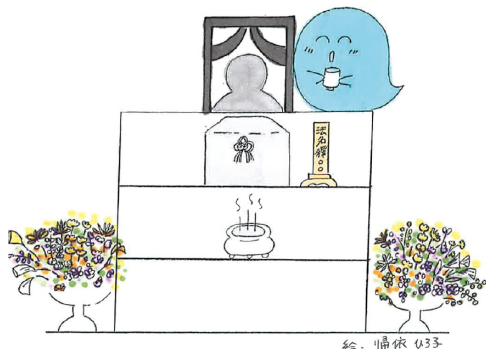
還骨の法要で配慮しておきたいことは、ご遺骨を永遠に自宅に安置するのではないということとです。ご遺骨には沖縄の祭具であるサン(ススキを編んだ魔除け)を同封したり、人目につかない後方に置き、あくまでも、仮安置を表現することが肝要かと思えます。サンの準備ができません。骨壺を白色の晒(さらし)布で包み、白房箱(しろぶさばこ)という白い房が正面にある紙箱の遺骨セットの様

式が一般的ですので、それを使用するとういでしょう。この白房は、故人様への成仏を敬ったり、ときには沖縄のサンと同様の魔除けの意味も兼ねているとのこととです。

還骨をどのように捉えるかがポイントですが、還骨は納骨までの前段階のステップですので、納骨としての手順を踏んでいるということとで差し支えないかと思えます。

還骨の期間は、四十九日やミイサー(新仏)という一周忌や三回忌までとの現代的な沖縄のしきたりもありませんので、その間はしばらく娘様やお孫様へお婿様の供養を任せしてあげることが大切かもしれません。

「時の経過も尊いご供養」と、娘様やお孫様を信頼して、見守っていただけたらと思います。



絵・帰依 033